



JICA 草の根技術協力事業に宮崎大学の事業が採択

— 宮崎大学初のアフリカ事業、ミルクから始まるワンヘルス構想 —

ルワンダ北東部の牛乳バリューチェーン「Farm to Cup」強化に向けた酪農家向け技術サービス強化事業

国立大学法人宮崎大学（学長：鮫島 浩）は、独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施する2025年度「草の根技術協力事業（パートナー型）」に、本学が提案した事業が採択されたことをお知らせします。本事業は、宮崎大学として**初めてアフリカ地域を対象としたJICA事業**であり、獣医学と畜産学の知見を基盤に、国際社会が直面する**食・栄養・健康課題の解決**に貢献する新たな国際協力モデルの構築を目指すものです。

■ 事業の背景と概要

アフリカ・ルワンダ共和国では、乳生産が住民にとって重要な栄養源・収入源である一方、乳房炎などの家畜感染症や搾乳時の衛生管理不足により、生産された牛乳の多くが流通に至らず廃棄されるという課題を抱えています。こうした課題は、農家の貧困や子どもの栄養不良など、社会的問題とも密接に関連しています。本事業では、宮崎大学産業動物防疫リサーチセンター（CADIC）と農学部を中心に、ルワンダ大学畜産獣医学部、現地獣医師、酪農家などと連携し、農場から消費者のコップに届くまでのミルク生産過程全体を見据えた「Farm to Cup」型の乳衛生管理モデルを構築し、衛生的なミルクの市場への供給量を改善します。獣医学・公衆衛生学・農学を横断する本学の研究成果を、**実社会の現場で実装する点に大きな学術的意義**があります。

■ ミルクから始まるワンヘルス構想

本事業は、「ミルク」を切り口に、**動物の健康・人の健康・環境の健全性**を一体的に考えるワンヘルス（One Health）アプローチを実践するものです。安全なミルク生産を通じて、家畜感染症対策、食の安全、栄養改善を同時に達成するモデルの確立を目指します。

■ 社会的意義および宮崎県への波及効果

本事業は、ルワンダにおける酪農家の収入向上や子どもの栄養改善に寄与するだけでなく、**畜産県である宮崎県への波及効果**も期待されます。海外の現場で得られる衛生管理技術や人材育成の知見は、国内畜産業が直面する感染症対策や人材不足といった課題解決にも応用可能であり、「地域から世界へ」という宮崎大学の理念を体現する取り組みです。

■ 今後の展望

宮崎大学は、本事業を起点としてアフリカ地域との学術連携を一層強化するとともに、ワンヘルス分野における国際的な教育・研究拠点形成を目指します。

【事業概要】

- **事業名**：ルワンダ北東部の牛乳バリューチェーン「Farm to Cup」強化に向けた酪農家向け技術サービス強化事業
- **事業期間**：2026年10月～2029年9月
- **実施国**：ルワンダ共和国（東部県ニヤガタレ地区）
- **実施主体**：国立大学法人宮崎大学（産業動物防疫リサーチセンター/農学部）

■ルワンダの酪農家の様子など



■草の根技術協力事業について

国際協力の意志のある日本の NGO/CSO、地方自治体、大学、民間企業等の団体が、これまでの活動を通じて蓄積した知見や経験に基づいて提案する国際協力活動を、JICA が提案団体に業務委託して JICA と団体の協力関係のもとに実施する共同事業です。

参考 URL : <https://www.jica.go.jp/partner/kusanone/what/index.html>

【問い合わせ先】

国立大学法人宮崎大学産業動物防疫リサーチセンター

岡林 環樹 TEL : 0985-58-7575/E-mail : okbys81@miyazaki-u.ac.jp

【発信元】

国立大学法人宮崎大学企画総務部総務広報課

TEL : 0985-58-7114/E-mail : kouhou@miyazaki-u.ac.jp